

第4節 史跡周辺の調査成果

1 社会環境

南房総市は、房総半島南部に位置し、^{たてやまし}館山市、^{かもがわし}鴨川市及び^{きよなんまち}安房郡鋸南町と隣接している。平成18年3月に^{とみうらまち}富浦町・^{とみやままち}富山町・^{みよしむら}三芳村・^{しらはままち}白浜町・^{ちくらまち}千倉町・^{まるやままち}丸山町・^{わたまち}和田町が合併して誕生した。市の面積は230.12km²で県下4番目の広さである。

北側には県下最高峰の^{あたごやま}愛宕山（標高約408m）をはじめ、^{とみさん}富山（標高約349m）など標高300m以上の山々が連なっている。西側は東京湾、東側及び南側は太平洋と三方を海に囲まれ、その海岸線は南房総国定公園に指定されている。

東京都心から100km圏内に位置しており、鉄道や高速バスなどの公共交通による交通網が整備され、さらに、自家用車では東京湾アクアライン、館山自動車道及び富津館山道路の開通により、東京都心部や県庁所在地の千葉市まで、それぞれ70分程度で到着することができる。

岡本城跡は、市内北西部の富浦地区に所在する。城の約400m南に富浦駅が所在し、城跡内をJR内房線と房総半島西岸の主要道路である国道127号が南北に通っていることから、交通の要衝にあるといえる。城跡が立地する丘陵は東西に頂上があり、海にせり出した西側の頂上（標高約63m）は「城山」、^{しろやま}対する東側の頂上（標高約67m）は「^{ひじりやま}聖山」と呼ばれている。城山頂上の里見公園から西側を望むと、戦国時代には後北条氏が治めていた三浦半島を一望することができる。

2 自然環境

①地形

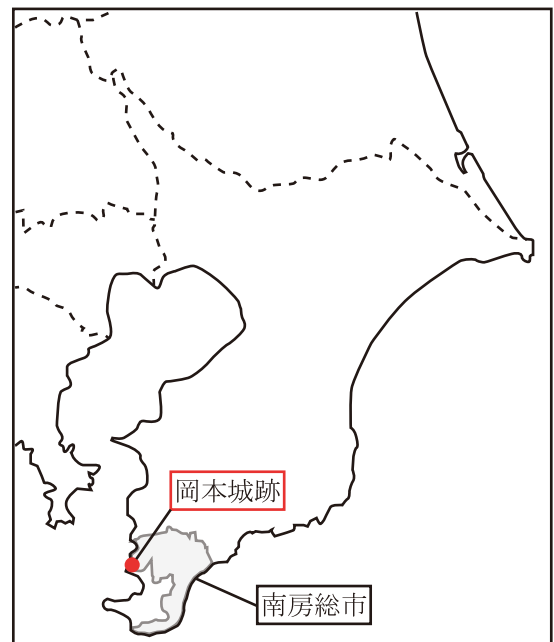
安房地域は、^{きよすみやま}清澄山から^{のこぎりやま}鋸山を結ぶ清澄山系以南のほぼ三角形の地域で、房総丘陵と大小の河川によって形成された沖積平野からなる。小規模な河川の下流部に、小沖積平野が各地に展開している。岡本城は、平坦面が狭く樹枝状に入り組んだ尾根上の丘陵と、その基部にあたる標高約200～300mの山地から形成される安房丘陵の先端部に立地する。

城に面している海岸は、地殻変動や海面水準の変化により海岸段丘が発達している。元禄16年（1703）の元禄地震発生時の海底は、現在5～6mの高さに隆起し、さらに、大正12年（1923）の関東大震災で海底が1～2m隆起し、岩礁を形成している。

②地質

房総丘陵の地質は、一般的に多くが^{しんせいだい だいさんき}新生代第三紀の不整合に堆積する凝灰岩砂岩の^{ほた}保田層及び^{あまつ}天津層で構成されている。保田層は掘削が容易な層で、天津層は比較的固い層である。

富浦地区は、こうした岩盤からなる山地が東京湾に流入する小河川や海によって浸食を



第7図 南房総市及び史跡位置図

受けた、標高 50 ～ 100m を主体とする丘陵地帯である。

③気候

安房地域は、黒潮とその分流が流れ込む影響で年平均気温 15℃、最寒月（1月）の平均気温も 6℃と温暖である。房総半島最南端の白浜地区周辺は、無霜地帯となっている。年降水量は約 1,800 ～ 1,900mm 前後と温暖多雨な海洋性気候である。

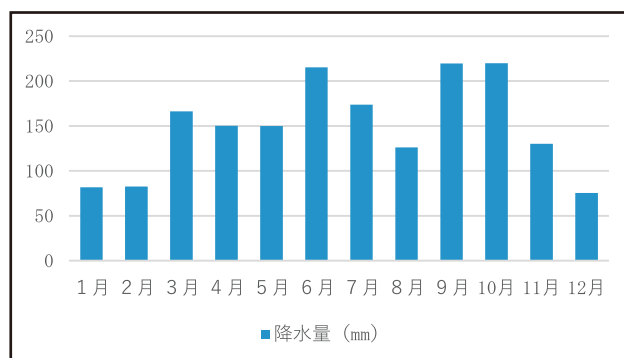
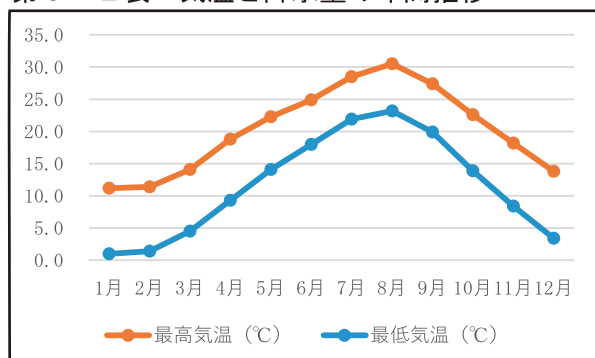
富浦地区の山地は、浸食による細い谷あいをもつため、冬期に山腹を下る大気の流れによって、中腹にやや気温が高い山腹温暖帯を形成する。そのため平地よりも山地の方が温暖になることがある。

第 5-1 表 安房地域の気候

気 温	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
最高気温 (℃)	11.2	11.4	14.1	18.8	22.3	24.9	28.5	30.5	27.4	22.6	18.2	13.8	20.3
最低気温 (℃)	1.0	1.4	4.5	9.3	14.1	18.0	21.9	23.2	19.9	13.9	8.4	3.4	11.6
平均気温 (℃)	6.3	6.6	9.5	14.2	18.1	21.2	24.8	26.4	23.3	18.1	13.3	8.7	15.9

雨 量	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
降水量 (mm)	81.8	82.4	166.2	150.2	149.8	215.2	173.6	126.0	219.5	219.9	130.0	75.4	1790.0

第 5-2 表 気温と降水量の年間推移



館山観測所（館山市長須賀）1981～2010年データ

④植生

房総半島は、しょうようじゅりんたい照葉樹林帯の東限であり、熱帯型森林と温帯型森林の移行域に位置している。安房地域では、上総丘陵に広がるコナラ・クリの落葉樹林、スギ・ヒノキの常緑針葉樹林に加えて、特に南部の海岸地域においては暖林帯である常緑広葉樹のシイ・タブ林がまとまって分布し、その状況は海岸線に沿って顕著である。

西からの季節風が強い富浦地区では、防風林としてマテバシイやタブノキ、ケヤキが植えられている。山地が奥深くまで利用されているため、自然林が少ないがたいぶさみさき大房岬などではみることができる。杉林は需要がなくなった薪炭林やカヤ山として植林されたものが大部分であり、そのため規模が小さく木々の樹齢は若い。史跡周辺を流れるしおいりがわ汐入川では、メダケ河畔林がみられる。

⑤生態

ここでは陸地の生物のみを取り上げる。

宅地周辺では、スズメ・ムクドリ・キジバト・ドバト・ハシブトガラスがみられる。史跡周辺の山地は、ビワ山等の利用のため他地域よりも開拓されているが、リス・ノウサギ・イタチ・タヌキ・アナグマをみかけられる。大正の頃まではキツネなどもみられたという。

近年は、人工的に放逐されたイノシシをはじめアライグマなどの有害鳥獣が山地だけでなく、民家近くでもみられるようになっている。

3 歴史環境

史跡周辺では、旧石器時代～近現代の遺跡、中近世を中心とした文献史料が残されている。遺跡の立地条件は、大房岬に所在する遺跡と沖積平野に広がる遺跡、そして丘陵斜面に造られた横穴墓・やぐらに分けられる。

以下に、周辺の遺跡の分布を中心に各時代について概観する。文章内の（ ）の番号は、第8図（p. 29 参照）の遺跡番号と対応する。

①中世以前

安房地域で唯一、旧石器時代の遺物が出土している大房岬遺跡（33）が所在する。このことから、史跡周辺は県南においても古い時期の生活痕跡が残されていることがわかる。

同じく大房岬に所在する藤四郎台遺跡（35）では、縄文時代早期前半の土器が採集され、深名遺跡（25）からは縄文時代中・後期の土器や石器が出土している。特に深名遺跡では、県内で出土例が少ない曾利式がみられるなど、相模や東海系の影響がうかがえる。

弥生時代の遺跡は、縄文時代に比べて大規模なものは見つかっていないが、岡本川の両岸に所在している（向原遺跡（20）・上前田遺跡（28）・大久保遺跡（29））。発掘調査が実施されていないため詳細は不明であるが、土器の散布が確認されている。

古墳時代に入ると遺跡数が増加する。沖積平野を中心に広がる集落遺跡（大久保遺跡、吉田遺跡（19））の他に、現在は消滅したが大房岬にも遺跡が残されていた（松原遺跡（32）、磯の脇遺跡（31））。大武佐古墳（30）は、開発により削平されたため墳形・墳丘規模等は不明だが、須恵器や直刀が出土した。墳丘墓が少ない安房では貴重な資料である。また、丘陵の斜面などを削って埋葬施設である横穴墓が築造された（2～11、13～14）。

養老2年（718）年に安房国が成立する。この時期の遺跡は、岡本川南岸と大房岬に広がっている。また、現在は消滅してしまっただが、栗田条里（21）や花園条里（24）など集落の近くには生産遺跡が存在していた。平安時代に編纂された『和名類聚抄』の中に「平群郡達良 太太良」がみえるが、これは現在の富浦地区全域が比定されている。建武4年（1337）には室町幕府の管領、斯波家長が本間兵衛五郎入道（覚法）に安房国多々良庄内の知行を安堵している。

②中世

岡本城に近接する宮ノ台遺跡（12）は、平成26年度に国道トンネル改築工事に伴い、県教育委員会により調査が行われた。現地踏査の結果、見張り台や有事の際の水軍の避難施設として機能した里見氏の城郭とされた。

史跡周辺には砦が点在していた（床城城跡（15）、宮本手代遺跡（18））ため、現在も当城・床城・手代などの地名が残されている。

また、横穴墓を転用した中世の供養施設と考えられているやぐら（当城やぐら群（27）など）が、丘陵斜面に築造された。

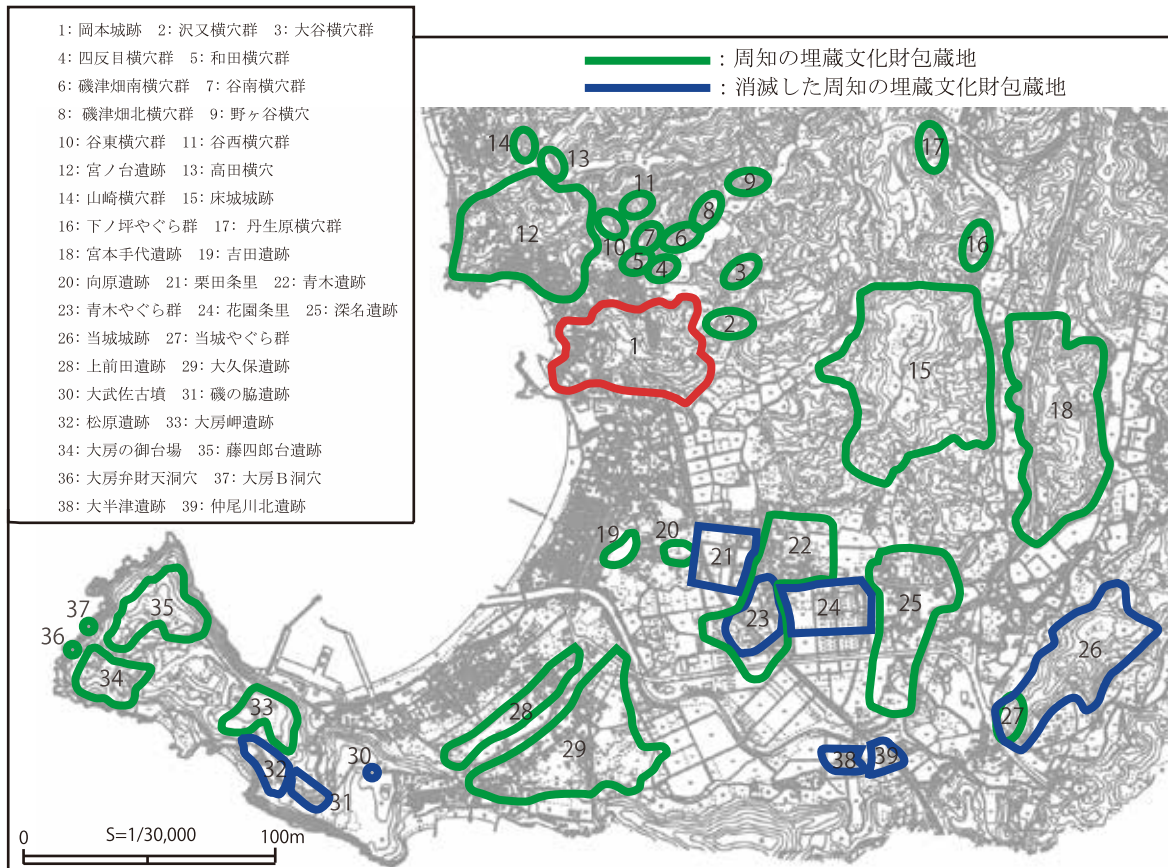
③岡本城跡・廃城後

近世期の史跡周辺は、汐（塩）入村・坂ノ下村・岡本村・原村に分かれていた。漁業を中心とした生業が営まれていたため、漁業争論文書や裁許絵図が残されている。残されている史料では、慶長19年（1614）に岡本村が鷹狩りで東金御殿に休泊した徳川家康にヒラメ、イセエビ、アワビなどを献上して以来、寛永7年（1630）まで数回にわたり魚介類

を献上していたことが記録されている。

享和元年(1801)に伊能忠敬が、日本地図作成の一環で富浦地区周辺の測量をしている。

江戸時代末期、外国船が日本近辺に現れるようになると、幕府は東京湾防衛のため沿岸に砲台を設けた。大房岬に残されている砲台跡もその一つである。大砲を据えた年代は明らかではないが、嘉永3年(1850)の絵図に、岬の上段3門、中段5門、下段5門の合計13門の砲台がみえる。この砲台は実際に使用した記録はみられないが、明瞭に砲台跡の地形が残されていることから、市史跡に指定されている。また、昭和3年(1928)から4年(1929)にかけて東京湾要塞の一環として、大房岬砲台が建設された。大正11年(1922)に結ばれたワシントン海軍軍縮条約により、廃棄された戦艦鞍馬の艦砲を陸上用に改造し、約80m間隔で2基(4門)配備された。太平洋戦争末期には、特殊部隊の兵器実験や訓練地となり、本土決戦用の海軍部隊の重要拠点となった。この要塞群についても市史跡に指定されている。



第8図 史跡周辺の周知の埋蔵文化財包蔵地



写真6 大房岬に残る砲台跡(左:幕末期の砲台跡、右:近代の砲台跡)

第3章 史跡の本質的価値

第1節 史跡の本質的価値

史跡里見氏城跡岡本城跡の築城から廃城までに構築された要素を、本質的価値として以下のとおり整理した。

＜史跡の本質的価値＞

- I 房総半島南部を拠点とした戦国大名里見氏の居城であり、「里見氏城跡」の一つである。
- II 戦国時代末期の大名である里見義頼が、本城として位置づけた城郭である。
- III 房総半島における戦国時代末期の城の中でも、大規模で、かつ、大規模な曲輪や堀切、切岸など地形を生かしたその複雑な構造は、房総半島南部における中世城郭の一つの到達点である。
- IV 東京湾に面して立地しており、城郭に港を取り込むなど水軍を擁していた里見氏らしい海城としての性格を有している。
- V 本城の変遷は、戦国時代における房総半島南部の政治・軍事情勢の推移を表している。

岡本城は、戦国時代に房総半島南部、特に安房を中心とした地域を治めていた里見氏の居城の一つである。里見氏は、本城を替えていくことが特徴の一つであり、岡本城は16世紀後半に里見義頼が当主を務めていた時に、本城として位置づけた城郭である。里見氏は、当主と後継者が異なる城に居城することが特徴だが、そうした領国内の広域的な体制だけでなく、周辺に宮ノ台遺跡や当城城など砦としての性格を持った城を抱えて、本城への守りも強めていた。

城郭内の遺構は良好に残されている。樹枝状に伸びた丘陵端に立地し、東西約600m・南北約300mの範囲に、自然地形を利用した遺構が随所に見られる。「城山」頂上の里見公園は、中世当時には主郭だったとされているが、曲輪と付随する腰曲輪、虎口、そして土橋などが造られている。主郭東側は、なだらかな丘陵傾斜地を直角に掘り込み、切岸として利用するなど凝灰岩質の岩盤を生かした構造になっている。主郭東側の丘陵「聖山」には、尾根を切断する防御的施設と井戸としての機能を併せ持った水堀が造られるなど、他の城郭には類例が少ない施設がみられる。水堀は地元の人々には柵ヶ池と呼ばれ、伝承などが多く残されている。また、石塁状遺構せきるいじょういこうも他の戦国大名の城郭では類例が少ない遺構である。

里見氏は、東京湾の制海権を巡って、対岸の三浦半島を領地としていた後北条氏と水軍を使った争いを繰り返していた。そのため、岡本城の他にも造海城や金谷城、そして館山城など海城としての性格を持った城郭を築城している。

里見氏は、本城を変遷させていく中で、当初は単郭構造だった城郭がその規模を拡大させるに従って、複数の曲輪からなる構造をとる。里見氏城跡は、房総半島における山城の変遷を知るうえで重要な城郭群であるといえる。さらに、周辺地域の戦国大名との合戦の中で、地理的条件が変遷していくことは、関東地方における中世の政治・軍事情勢を捉えるうえで重要である。『関東八州諸城覚書』をはじめとする文献史料から、県内では珍しく城郭が機能していた年代を特定できる城跡であり、房総の戦国城郭群の研究においても貴重な遺跡である。

第2節 既調査成果

岡本城跡は、現在までに範囲内容確認調査が2回、開発に伴う確認調査が2回実施されている。また、発掘調査だけでは捕捉できない城内及び周辺での史資料調査が、1回実施されている。

これまでの発掘調査により中世の柱穴列、曲輪造成の痕跡をはじめとする遺構が検出されており、16世紀に帰属する陶磁器類、かわらけが出土している。

調査面積が少なく、城跡全域の様相が捉えきれていないため、今後継続した発掘調査が必要になる。

以下に、各調査について概観し、検討を行った。

1 昭和60年度調査

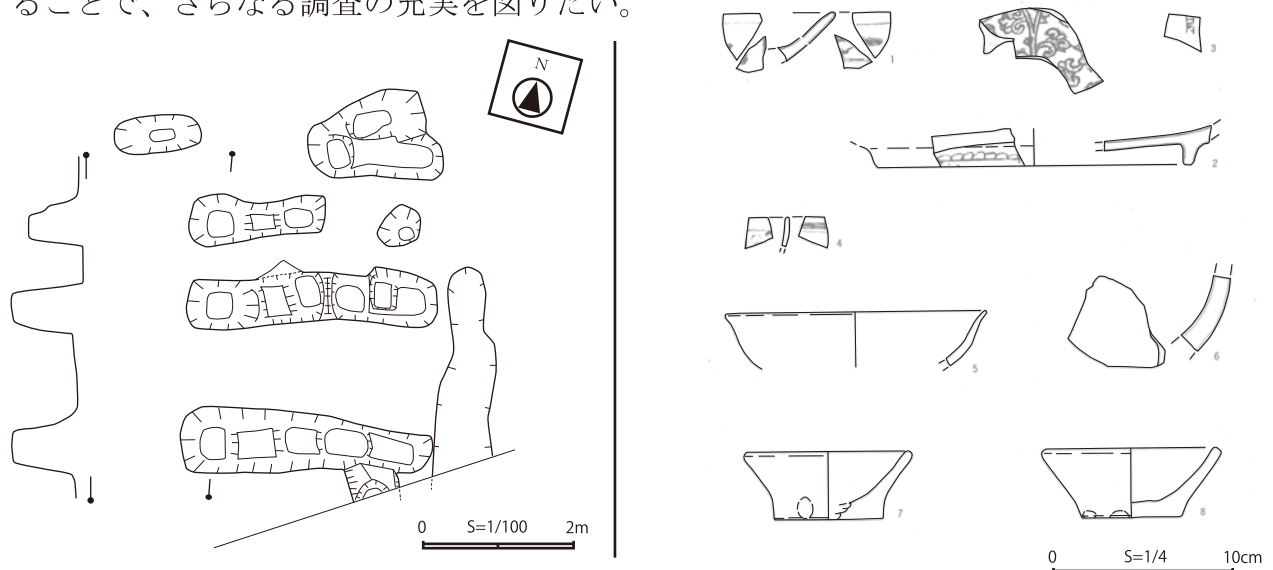
規模・構造等を把握し、保存及び活用を講ずる資料を得る目的で、千葉県教育委員会が昭和60年11月18日から28日まで測量と確認調査を実施した。

測量により城郭規模が、東西約600m、南北約300mと明らかになった。城郭の構造は尾根上に3か所、中段に1か所、裾部に4か所の曲輪、また斜面に多数の腰曲輪が認められた。

城の主要部とみなされていた頂上平坦部の曲輪の状況を把握するため、里見公園に2.5×9mと2m幅のトレンチ、計186㎡を調査範囲として設定し、発掘調査を実施した。調査の結果、深さ約1m、底径約30cm以上の布堀り状の柱穴が検出され、遺物は常滑大甕、貿易陶磁器、かわらけが出土した。陶磁器については全て中国製で、国産陶磁器はみられない。中でも染付は、万暦様式で岡本城が機能していた16世紀後半に位置づけられる。

測量調査を実施することで、初めて城全体の構造が判明した。その構造から各曲輪の機能についての検討もなされた。

報告書では検出した柱穴列から「天守閣に相当するような高層の建物」の存在を想定したが、調査ではその一部しか確認できず棟数や規模などが不明である。トレンチを拡張して全体の様相を把握する必要がある。測量についてはレーザー測量など新しい技術を導入することで、さらなる調査の充実を図りたい。



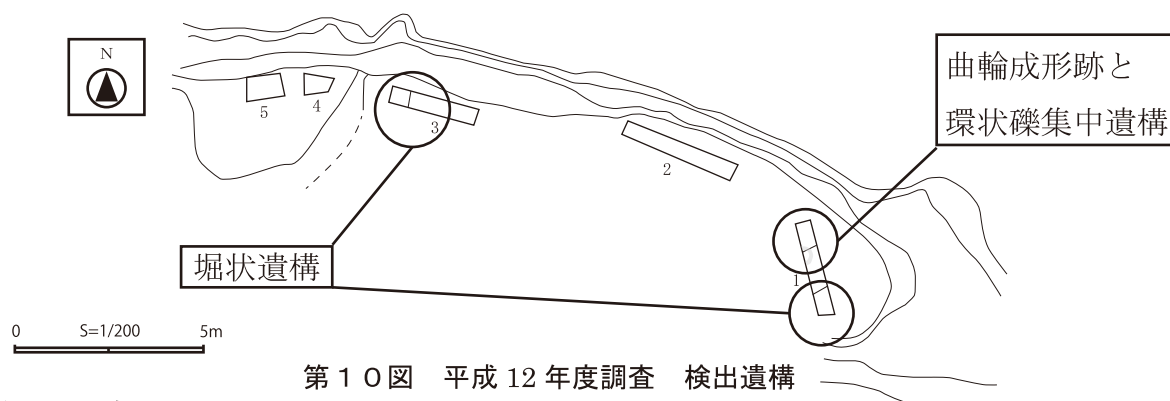
第9図 昭和60年度調査 検出遺構 出土遺物

2 平成 12 年度調査

農作業用道路新設に伴い、平成 12 年 9 月 25 日から 29 日にトレンチ 5 か所、計 90 m²の確認調査を実施した。調査主体者は財団法人総南文化財センターである。

1・3 トレンチからは、環状礫集中遺構や曲輪成形跡、堀状遺構など城郭造成に伴う遺構が検出した。曲輪成形跡は、岩盤を周辺より掘り下げ、整地された平坦面である。これは上段の曲輪の造成に伴い、削り出した部分と推測される。遺構確認面である岩盤から -1.5m 以上を未調査としたため、堀状遺構については、どの程度の深さを持つかは不明である。この調査で、遺物は出土しなかった。

「聖山」とよばれている、城郭の中でも東側に位置する丘陵部分は、この調査が実施されているのみである。確認調査という性格上、個々の遺構の一部分しか調査ができておらず、遺構の広がりが見えきれない。環状礫集中遺構については、城郭を造成するうえでどのような性格を有していたか、類例の確認が必要である。この調査は、発掘調査報告書が未刊行となっており、今後刊行が急がれる。報告書の作成過程でさらなる検討が必要である。



3 平成 19 年度調査

南房総市教育委員会は、平成 19 年 10 月 29 日から 11 月 16 日に城郭遺構の範囲及び内容確認のため、城内西側の主要な曲輪に 14 か所のトレンチを設定し、計 300 m²の調査を実施した。

検出遺構は、階段状遺構、柱穴列、ピット群、そして中世整地面とほぼ全てのトレンチから、城郭造成の痕跡が確認された。遺物は、かわらけ、国産陶器、貿易陶磁器、鉄製品、銭貨、そしてふいごの羽口が出土した。出土遺物の中心となるかわらけは、岡本城が機能していた 16 世紀に位置づけられる。

階段状遺構は、拳大の凝灰岩質泥岩ブロックで人為的な段差をつけたものである。丘陵端部であるので、防御性を高めるために造成されたと推測される。

柱穴列は、第 3・6・7 トレンチから検出されている。第 3 トレンチでは、約 3 尺幅で並ぶ掘立柱建物と考えられる柱穴列が検出された。形状が異なる柱穴が検出されたことから、複数回の建て替えも想定できる。完掘したいくつかの柱穴の底部を観察しても、岩盤が確認できないことから背後の丘陵斜面を削り、曲輪全体を整地していることがわかる。このトレンチからは、かわらけ、磁器片、銭貨、鉄製品、そしてふいごの羽口が出土していることから武器などを製造していた作業場の可能性も考えられる。

第 6・7 トレンチは昭和 60 年度調査時に設定されたトレンチと一部重複させて設定し、柱穴列の広がりを確認した。昭和 60 年の調査では高層建物の存在を想定したが、再検討

のうえで物見台としての役割を持つ建物が想定された。また、貿易陶磁器とかわらけが出土していることから、儀礼行為を行う場として使われた可能性がある。

ピット群は、第9・12トレンチから検出された。第9トレンチからは、かわらけや天目茶碗てんもくちやわんが出土している。第12トレンチからは、礎石になり得る方形の石材も検出されており、儀礼行為を行う建造物の存在が想定できる。

第14トレンチでは、中世の整地面とされる土質が異なる複数の層が流れ込むような堆積が、確認されている。一部の調査に留まるが、大規模に人為的な平場の造成がなされたと考えられる。

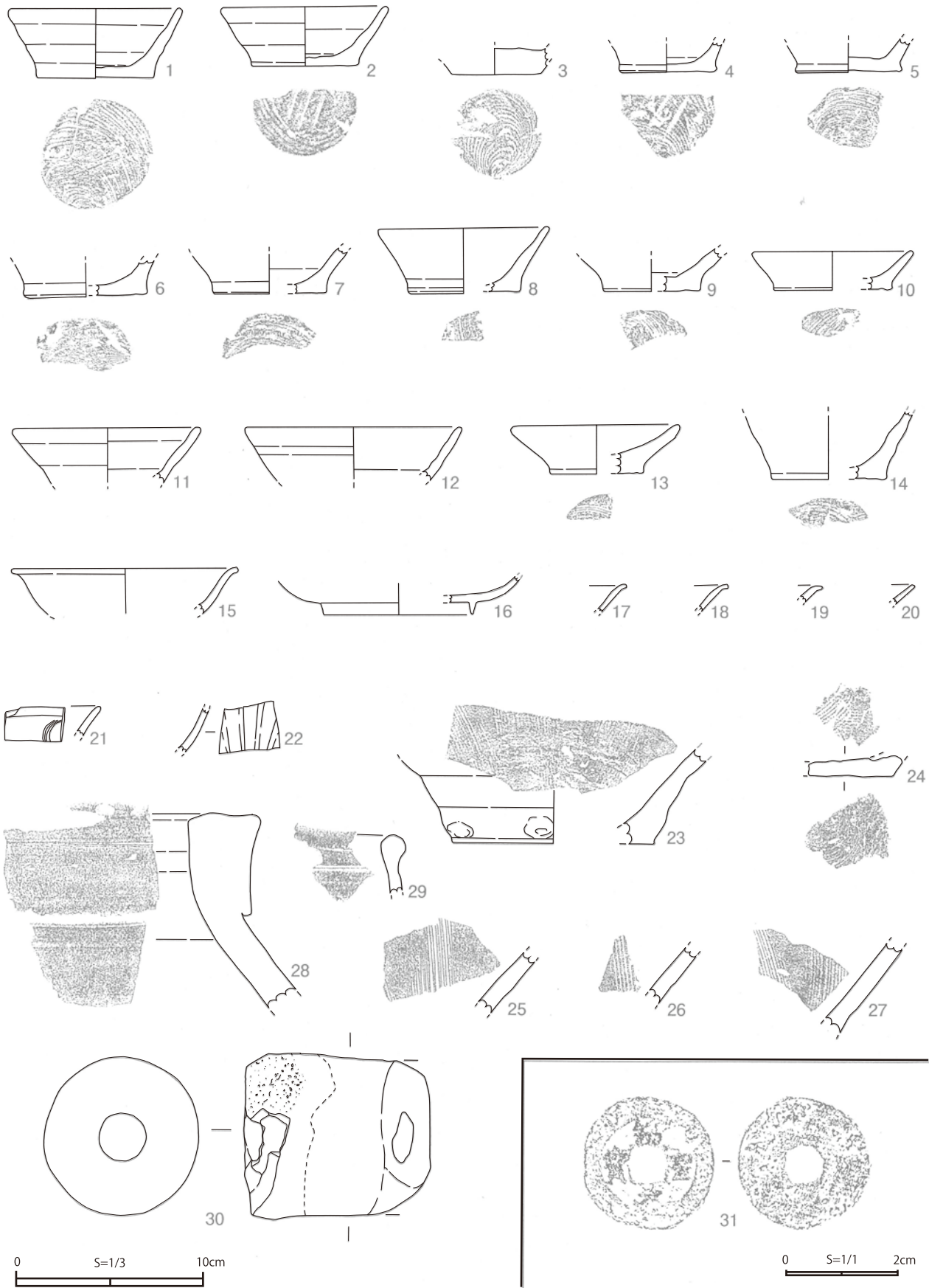
この調査では、出土遺物の中心は陶磁器であるが、白磁はくじとかわらけの出土が目立つ。これは天正期頃の房総半島の城郭、特に城内主要部にみられる傾向である。国道を挟んだ西側の曲輪に集中しており、この付近に城の中心的施設が所在していたことが想定される。

また、調査で最も特筆されるのは、第3トレンチから焼土を伴う整地層が確認されたことである。岡本城は天正16年もしくは17年に「国主御殿」の火災があったことが、史料（「岡本安泰奉納祝詞」那古寺文書 P.11参照）では確認されている。この火災の痕跡とみられる焼土が、遺構を覆うような形で検出されたこと、16世紀後半に位置づけられるかわらけを伴うことから文献史料を発掘調査で裏付けることができた。

遺構が検出されないトレンチもあり、今後トレンチを拡張した調査が必要となる。



第11図 平成19年度調査 トレンチ配置図



第 1 2 図 平成 19 年度調査 出土遺物

4 平成 22 年度調査

岡本城の城域確定を中心に、城内外に残る城郭遺構及び石造物ややぐら、古文書、そして伝承について調査を行い、中世当時の景観復元を目指す調査を実施した。

調査は、「城郭と城下」、「石造物とやぐらの分布」、「岡本城に関する史料」、「岡本城に関する伝承」と大きく4つに分けて行った。

「城郭と城下」では、平成 20 年の報告書での考察を付加する形で、榊ヶ池東側の丘陵と城下北側及び南側について、地名及び周辺環境から旧地形の想定がなされている。

「石造物とやぐらの分布」では、岡本城周辺の中世石造物の悉皆調査並びに近世初頭期の在銘石造物の調査を行った。調査点数は 70 基で、年代的には 16 世紀のものが多い。中でも、青木やぐらと里見義頼の菩提寺である光厳寺に残されている石造物の点数が多い。やぐらについては新発見のものを含み 9 か所 27 基の踏査を行い、概要がまとめられた。

「岡本城に関する史料」では、周辺の海禅寺、光厳寺、法華寺、長泉寺、個人宅の史料を調査し、その概要がまとめられている。市指定有形文化財（彫刻）長泉寺大黒天立像をはじめとした所蔵資料を撮影記録したうえで、再検討している。

「岡本城に関する伝承」では、聖大権現碑ひじりだいごんげんや榊ヶ池に関する民話が掲載されている。

初めて城下一帯の史料調査がなされた。しかし、様々な制約から未調査となった寺社仏閣があった。新規史資料の発見を含めた継続的な調査が必要である。

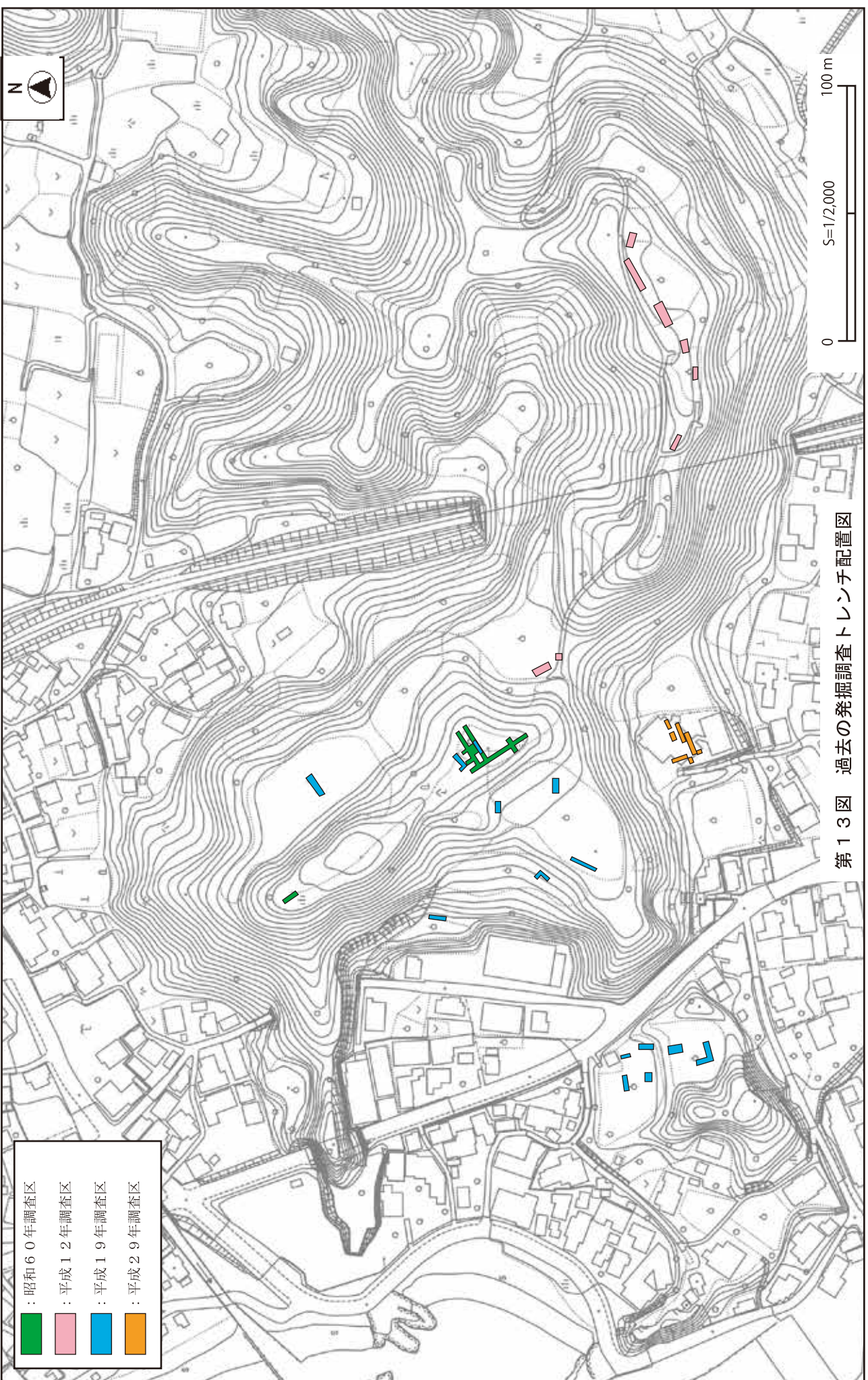
5 平成 29 年度調査

学校寄宿舎の建て替えに伴って、平成 29 年 6 月 29 日から 7 月 4 日に計 86 m²の確認調査を実施した。遺構・遺物とも確認できなかったが、北側丘陵部から南側の裾部に向かって、土質が異なる複数の層が流れ込むように堆積していることが確認できた。この層は少なくとも 5 m 以上は堆積していると想定され、人為的な平場造成の痕跡と考えられる。

昭和 60 年度調査の報告書内では、方形に張り出した平面プランと主郭から最も近い裾部の曲輪という立地から居館跡と比定されていた。しかし、遺構や遺物が確認されておらず、曲輪の性格を肯定する資料を得ることはできなかった。



- : 昭和60年調査区
- : 平成12年調査区
- : 平成19年調査区
- : 平成29年調査区



第13図 過去の発掘調査トレンチ配置図



平成19年調査写真

↑第6トレンチ 柱穴列検出状況

←第3トレンチ 柱穴列検出状況

過去の調査の出土遺物



写真7 過去の発掘調査遺構検出状況及び出土遺物

第3節 史跡を構成する諸要素

史跡の適切な保存管理・活用・整備を行うため、史跡を構成する諸要素の分類を下表のとおりまとめた。

まず、史跡を構成する諸要素を城郭の範囲内／外と、所在する場所ごとに分類した。次にその中でも中世当時の城郭を表す本質的価値を構成する諸要素／現代に残されている城郭跡を表すその他の諸要素と、その要素が持つ性格ごとに分類した。

さらに城郭の範囲内については、立地や性格から地区区分した（第15図、p.40参照）。地区ごとに概要と諸要素の整理を行い、第7表（p.41参照）のとおりまとめた。地区名は地名を元に名称を与えた。城郭の機能についてより検討が進めば、今後地区名は変更の可能性がある。

第6表 諸要素の分類

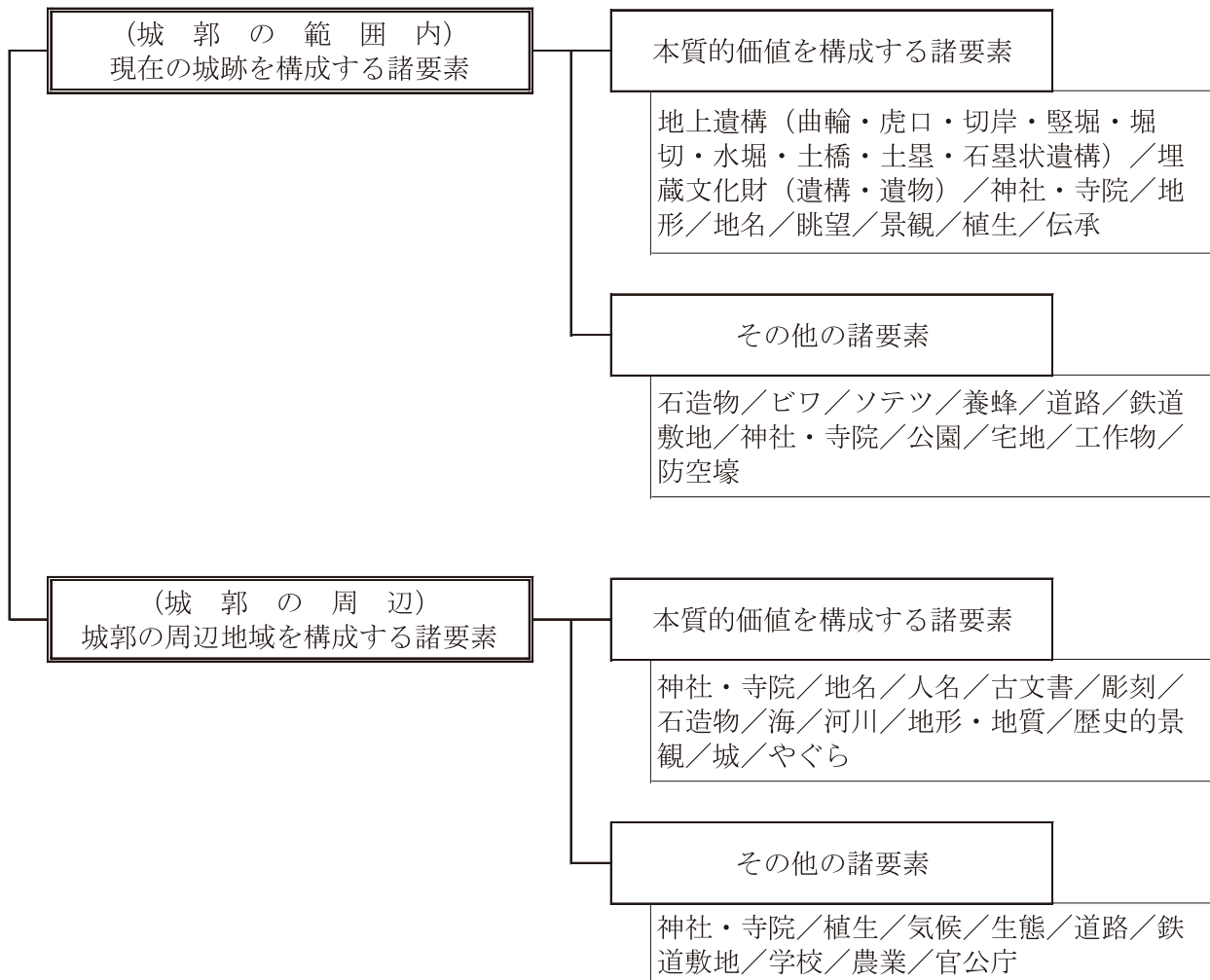


写真8
大房岬から望む房総半島（右）と三浦半島（左）